

日英の受動表現比較と θ 役

石 井 隆 之

0. はじめに

受動態は、日英に共通した文法現象である。

- (1) a. ジョンはメアリーに批判された。
- b. John was criticized by Mary.
- (2) a. 彼の論文はメアリーに批判された。
- b. His paper was criticized by Mary.

ところが、日本語では、(1)や(2)に見られる一般の受動態（これを直接受動と呼ぶ）に対し、間接受動と呼ばれる現象が存在する。

- (3) a. ジョンは自分の論文をメアリーに批判された。
- b. *John was criticized his paper by Mary.

日本語では、(1a) と (2a) が言えるからといって、「ジョン」と「彼の論文」を共に目的語にした表現は、英語の場合と同様不可能である。

- (4) a. *メアリーはジョンを彼の論文を批判した。
- b. *Mary criticized John his paper.

英語では、第4文型が存在するので、原則的には受身が2つできる。

- (5) a. John was sent the letter by Mary.
- b. ?The letter was sent John by Mary.

(5)に対する日本語を忠実に再現すると、おかしい日本語になる。

- (6) a. ??ジョンはその手紙をメアリーに送られた。[(5a)]
- b. *その手紙はジョンをメアリーに送られた。[(5b)]

第4文型の受身では、主語が異なると、目的語の助詞が異なる。そして、より自然にするには、by 句の訳を「によって」としたほうがよい。「に」の場合は、メアリーが着点である意味が出るからである。

(7) a. ?ジョンはその手紙をメアリーによって送られた。

b. ?その手紙はジョンにメアリーによって送られた。

「によって」句は主語の次におくのがもっと自然であろう。

(8) a. ジョンはメアリーによってその手紙を送られた。

b. その手紙はメアリーによってジョンに送られた。

(3b) が容認不可能なのは、(4b) から分かるように、criticize は第4文型を取らないからである。

(4b) の訳を第4文型的に訳した(9)も少し不自然である。

(9) ?メアリーはジョンに彼の論文を批判した。

したがって、(9)が正しいから(3a) が言えるとは断言できないのである。

また、間接受動文の助詞を入れ替えた文は、非文法的である。

(10) *ジョン^を自分の論文^はメアリーに批判された。

更に、(1a) と (2a) が言える「批判する」の場合と異なり、「人」の場合が目的語名詞句にならない(11)文の場合も、(3a) に対応する文が存在する。

(11) *ジャックを盗む。

(12) ジャックは自転車を盗まれた。

(12)に対応する英語は、やはり非文である。

(13) *Jack was stolen his bicycle.

ただし、次のように構文を変えたり、主語を変えたりすると容認される。

(14) a. Jack had his bicycle stolen.

b. His bicycle was stolen from Jack. ¹⁾

最後に「A の B」(英語では A's B) という形の主語を用いると受動態は可能となる。

(15) a. ジョンの論文は批判された。 [= John's paper was criticized.]

b. ジャックの自転車は盗まれた。 [= Jack's bicycle was stolen.]

以上のように、日本語と英語では、受動表現に構造的な違いがあるが、生成文法の枠組みによる原理的な説明の可能性を探ることが、本稿の目的である。

1. 日英の構造差と PP

1. 1. 文の成り立ちにおける日英の根本的違い

(16a) の英文を、前置詞を用いて名詞化をすると (17a) のようになる。

- (16) a. John gave Mary a doll.
 b. ジョンがメアリーに人形をあげた。[(16a) の訳]

- (17) a. the gift of a doll to Mary by John
 b. ジョンがメアリーに人形をあげること [(17a) の訳]

(17)を観察すると、英語の前置詞が日本語の助詞に対応していることが分かる。

- (18) a. by → 「が」：主格
 b. to → 「に」：与格
 c. of → 「を」：対格

日本語文では、(16b)と(17b)にあるように、文でも句でも「助詞」を用いる。一方、英文において、名詞句に全て前置詞を用いると非文になる。

- (19) a. ジョン が メアリー に 人形 を あげた。[(16b)]
 b. *By John gave to Mary of a doll.

つまり、英文の場合は、主語位置では by の省略が、他動詞の場合 of の省略が、また、第4文型においては、to の省略が義務的である。

受身構文では、by 句が、第3文型では与格を示す to 句が現れる可能性があるが、一般に英文では、前置詞がなくなる傾向が強いのである。

日本語では、対格の助詞の省略は、少し容認度が落ちるものの一応可能であると判断できるが、主格の助詞の省略は容認度が更に落ち、与格の助詞は省略できない。基本的には、口語であっても、省略を促さない傾向が見られる。

- (20) a. ?ジョンがメアリーに人形あげた。
 b. ??ジョンメアリーに人形をあげた。
 c. *ジョンがメアリー人形をあげた。

1. 2. 受身表現と省略現象

1.1.で考察した省略現象を忠実に、日英の受身表現に当てはめてみる。ただし、Pとは英語の前置詞、日本語の助詞(=後置詞)を示す。

- (21) Pを省略しない場合
 a. ジョンがメアリーに批判された。
 b. *By John was criticized by Mary.

- (22) 受身の主語のPを省略する場合

a. ?ジョンメアリーに批判された。

b. John was criticized by Mary.

㉓ 動作主格のPを省略する場合

a. *ジョンがメアリー批判された。

b. *By John was criticized Mary.

㉔ 全てのPを省略する場合

a. *ジョンメアリー批判された。

b. *John was criticized Mary.

(21)~(24)から分かることは、日本語は名詞句がPにより認可されており、英語は受身の主語がI (=屈折句の主要部)により、動作主格がP (= by)により認可されるということである。²⁾

英語における受身構文の主語の認可について、確認しておこう。

㉕ a. criticize John

b. be criticized John

D構造が(25a)の状況であれば、Johnはcriticizeから目的格を授与されるので、Johnはそのまま認可されるが、受身構文ではD構造が(25b)の形になっており、この形はJohnに目的格を与えることができないとされ、Johnは格を受けるために主語位置に強制的に移動されるのである。主語位置では、IによりJohnが認可されるので、文法的文が派生する。

以上を踏まえて、(3)の間接受動について考察しよう。

㉖ a. ジョンは自分の論文をメアリーに批判された。[(3a)]

b. *John was criticized his paper by Mary. [(3b)]

(26a)は、「自分の論文を」という表現が入っているから間接受動と呼ばれ、それに対応する英語(26b)は非文であるとされる。

(26b)文が非文である理由は、his paperがどの範疇からも格を受けることができないからである。一方、(26a)が文法的なのは、「を」が名詞句(=「論文」)に対して格を与えているからであると言える。

したがって、英語の場合は、構造的に格を与えられないならば、語彙的に格を与えるようにする、即ち、適当な前置詞を名詞句の前に置くことによって、その名詞句が認可されると類推できる。criticizeの場合は、forがその適切な前置詞となる。

㉗ John was criticized for his paper by Mary.

1. 3. 日英の発想の違いとPP

日英のPP (preposition/postposition phrase) の特性とθ役の関係を述べる前に、PPの視点からの日英の発想の違いについて、少し触れる。

- ⑳ a. 神戸 で 大きな地震があった。
 b. There was a big earthquake in Kobe.
- ㉑ a. 私の兄は戦争 で 目を失った。
 b. My brother lost his eyes in the war.
- ㉒ a. 彼はハンカチ で 口を拭いた。
 b. He wiped his mouth with a handkerchief.
- ㉓ a. 彼女はドアマット で 足を拭いた。
 b. She wiped her feet on a doormat.
- ㉔ a. 彼は掃除機 で 部屋を掃除した。
 b. He cleaned his room with the vacuum cleaner.
- ㉕ a. 彼女は洗濯機 で 服を洗った。
 b. She washed the clothes in the washing machine.
- ㉖ a. 私はミシン で ドレスを縫った。
 b. I sewed the dresses on the sewing machine.

「で」という助詞は、大雑把に分類すれば「場所」と「道具」を表す。㉑と㉒の例は、「場所」を、㉒～㉖の例は「道具」を表すと思われる。

(28a) と (29a) の「で」は、英語でも同じ in を用いるからといって、全く同じ機能を持っていると断言することはできない。というのは、(29a) の「で」は時間的な側面を持っているからである。それが証拠に、英語では during the war と置き換えることができる。

「道具」の「で」は、英語では常に with とは限らない。自分の手で持ち上げて、ある程度コントロール可能な道具を表す場合のみ、with を用いる。

ドアマットや洗濯機、またミシンは手で持ち上げて使うわけではないので、with を用いないのである。洗濯機は、洗濯物を洗濯槽に入れて洗うので in を用いる。

一方、ドアマットとミシンは、on を用いるが、事情が異なる。ドアマットの場合は、「場所」を示す「で」との共通点がある。というのは、次のように言えるからである。

- ㉗ 彼女はドアマットの上で足を拭いた。

しかし、ミシンの場合は、ミシンの機械の針と縫いつける布との接触面を強調して on を用い

ているのである。

いずれにせよ、日本語と英語では発想が異なることが、同じことを表すのに、Pが異なる点から明白なのである。

1. 4. θ 役と P の関係

1.3. で挙げた「道具」や「場所」というのは意味役割 (= θ 役) で、これを表すのに、英語と日本語ではPが異なり、また、Pと θ 役は必ずしも1対1対応をするわけではないことが分かる。

1.3. で論じたことをPと θ 役の視点でまとめると次のようになる。

㉞ a. with, on, in → 「で」: 道具

b. in → 「で」: 場所

勿論、「場所」という意味役割をマークするPに、日本語では「に」もあり、英語ではonやatもある。

同じPでも2つの θ 役を担うことがあるために、意味が曖昧になることがある。㉞を見てみよう。

㉞ 研究室に電話があった。

㉞の「に」は元来「場所」と「着点」の2つの θ 役を担うので、名詞が「もの」と「こと」を表す場合は、文が曖昧になる。

㉞ a. 名詞が「もの」のとき、「に」は「場所」を表す→研究室に電話機があった。

b. 名詞が「こと」のとき、「に」は「着点」を表す→研究室に電話がかかってきた。

なお、名詞が「こと」のとき、そのことがある場所で行われるという状況を表したい場合は、「に」は使えず、「で」が用いられる点に注意したい。

㉞ a. *運動場にスポーツ大会があった。

b. 運動場でスポーツ大会があった。

2. 項構造の日英差

2. 1. 受動態の背景の類似と項構造

「はじめに」で示した受動態を項構造の視点から、再度考察することにする。

(40) a. ジョンはメアリーに批判された。 [= (1a)]

b. John was criticized by Mary. [= (1b)]

(41) a. 彼の論文はメアリーに批判された。 [= (2a)]

b. His paper was criticized by Mary. [= (2b)]

(42) a. ジョンは自分の論文をメアリーに批判された。 [= (3a)]

b. *John was criticized his paper by Mary. [= (3b)]

(40)から、日本語の「批判する」も、英語の“criticize”も、ともに、「動作主」(Agent)と「経験者」(Experiencer)の2つの項を取ることが分かる。経験者はExpで示す。

(43) a. 日本語：「メアリー」 (= Agent), 「ジョン」 (= Exp)

b. 英語：“Mary” (= Agent), “John” (= Exp)

また、(41)で分かるように、日英共に「動作主」と「主題」(Theme)のθ役も担うことができる。

(44) a. 日本語：「メアリー」 (= 動作主), 「彼の論文」 (= Theme),

b. 英語：“Mary” (= Agent), “his paper” (= Theme)

さらに、(42)から理解できるように、日本語の受動態では、「動作主」, 「経験者」および「主題」を全て1文に取り入れることが可能である。したがって、日英の受動態における項構造は、次のようになる。(ただし、下線部は外項に現れるθ役)

(45) a. 日本語：第1型 [Exp, Agent]

第2型 [Theme, Agent]

第3型 [Exp, Theme, Agent]

b. 英語：第1型 [Exp, Agent]

第2型 [Theme, Agent]

(45b)から、英語は、第3型、すなわち、ExpとThemeとAgentがすべて現れる形は存在しないと思われる。しかし、前置詞を駆使すれば、この3つのθ役が存在する点に注目したい。

(46) a. *John was criticized his paper by Mary.

b. John was criticized for his paper by Mary. [= (27)]

また、各θ役は、日英ともに、各型について、義務的に生じなければならないということはない。たとえば、by句は省略可能である。

(47) a. ジョンは批判された。

b. John was criticized.

(48) a. 彼の論文は批判された。

b. His paper was criticized.

しかし、義務的要素もある。たとえば、英語では主語は省略されないので、外項に現れるθ役

は、日本語に比べ、義務的である。

(49) a. ?メアリーに批判された。

b. *Was criticized by Mary.

なお、時や場所を表す θ 役は、完全に任意である。つまり、前置詞を用いて時や場所を、criticize を用いた受身構文に添えることができる。

(50) a. ジョンは、3月5日に彼の家で、メアリーに論文を批判された。

b. John was criticized for his paper on March 5 in his home by Mary.

以上のことから、項構造は若干異なるものの、受身構文に特定の用いられる θ 役は、日英ともに共通して、3種類、すなわち、「Exp」(経験者)、「Theme」(主題) および「Agent」(動作主) であると言えることがわかる。

2. 2. 受動態の条件

日英の θ 役の種類と数が受身構文で共通しているということを、2.1. で論じたが、項構造のあり方 (P を用いるかどうか、主語の省略を容認できるかどうかなど) は明らかに異なる。

日英共通して、受身構文になりにくい θ 役が存在することもある点に触れておく。

(51) a. Jack left Osaka.

b. ジャックは大阪を発った。

(52) a. *Osaka was left by Jack.

b. *大阪はジャックに発たれた。

(53) a. Jack left the job.

b. ジャックはその仕事を残した。

(54) a. The job was left by Jack.

b. 仕事はジャックに残された。³⁾

なぜ、(52)と(54)の差が出るのであろうか。これには、主題階層が関係していると思われる。主題階層とは、 θ 役により階層が異なるという発想である。

(55) 主題階層

a. 高：動作主 (Agent)

b. 中：起点 (Source), 着点 (Goal), 場所 (Location), 経験者 (Experiencer)

c. 低：主題 (Theme)

そして、主題階層の視点から、受身の条件は、次のように考えられている。

⑥ 受身の主語に与えられる θ 役は、その他の名詞句（または P 句）に与えられる θ 役よりも階層が低くなければならない。

⑦ では、日英ともに受身の主語に「場所」(中) が来ており、by 句の Jack は「主題」(低) である。⁴⁾

一方、(54) では、仕事は「主題」(低) で、Jack は「動作主」(高) なので、受身が可能なのである。

2. 3. 格付与の日英差

受身構文と項構造のあり方に触れる前に、格付与の日英差を確認しておく。そもそも名詞句は、V (= 他動詞) または P (= 前置詞または後置詞) により格を受けなければならない。英語では、次のような格付与が行われる。

⑦ a. V : 直接目的語に対して「対格」、間接目的語に対して「与格」を与える。

b. P : 目的語に対して「斜格」を与える。

c. I : 外項に対して「主格」を与える。

一方、日本語は、次のような一般式が言えるから、すべての名詞は格を P から受けていると考えてよい。

⑧ 日本語の文 = V グループ [= Mod V] + P 句グループ [= Σ (NP + P)] + 副詞類

P がいない場合でも、受身構文の主語の場合、I (= 屈折句主要部) から「主格」を受ける可能性があると考えられるので、容認度がそれほど低くない。

また、目的語の「を」を省略しても完全な非文にならないのは、日本語の場合は受身形の動詞でも格を与えている可能性があるからである。

しかし、動作主を示す「に」の省略が不可能なのは、格を受ける環境にないからである。即ち、受身形の動詞は動作主格を NP に与える能力はないと考えられるのである。

⑨ a. ?ジョン、論文をメアリーに批判されたよ。

b. ?ジョンは、論文、メアリーに批判されたよ。

c. *ジョンは、論文をメアリー批判されたよ。

3. 受動態の日英差とその原因

3. 1. 態と P および統語的位置の関係の日英差

前節で、日英共に「批判する」(criticize) という動詞が要求する θ 役が共通し、それは、「動

作主」(Agent),「経験者」(Exp), および「主題」(Theme) の3つであり, しかも, その θ 役を担う範疇の現れ方が異なることを論じた。また, θ 役を担う範疇を構成するPや, その範疇の構造上の位置において, 1対1対応が見られるわけではないことを示した。

Mary を Agent, John を Exp, paper を Theme とした場合の, 日英において, 生成される文を, 能動態と受動態の両方において, 総整理してみる。

⑥0 日本語の能動態

- a. メアリーはジョンを批判した。
- b. メアリーがジョンを批判した。
- c. メアリーは論文を批判した。
- d. メアリーが論文を批判した。
- e. メアリーはジョンの論文を批判した。
- f. メアリーがジョンの論文を批判した。
- g. ジョンはメアリーが批判した。
- h. 論文はメアリーが批判した。
- i. ジョンの論文はメアリーが批判した。

⑥1 日本語の受動態

- a. ジョンはメアリーに批判された。
- b. ジョンがメアリーに批判された。
- c. 論文はメアリーに批判された。
- d. 論文がメアリーに批判された。
- e. ジョンの論文はメアリーに批判された。
- f. ジョンの論文がメアリーに批判された。
- g. ジョンは論文をメアリーに批判された。
- h. ジョンが論文をメアリーに批判された。
- i. 論文をメアリーに批判された。⁵⁾
- j. *ジョンをメアリーに批判された。⁶⁾

⑥2 英語の能動態

- a. Mary criticized John.
- b. Mary criticized the paper.
- c. Mary criticized John's paper.

- d. John, Mary criticized.
- e. The paper, Mary criticized.
- f. John's paper, Mary criticized.

(63) 英語の受動態

- a. John was criticized by Mary.
- b. The paper was criticized by Mary.
- c. John's paper was criticized by Mary.

なお、日英共に Agent である「メアリーに」や by Mary は省略可能である。また、日本語では「ジョンは」など「～は」という話題を示す Agent, Exp や Theme は省略可能である。

θ 役と P との関係を整理してみる。

(64) 日本語の態の差によるθ役とPの関係

- a. 能動態：Agent … 「が」「は」⁷⁾
 Exp … 「を」「は」
 Theme … 「を」「は」
- b. 受動態：Agent … 「に」
 Exp … 「が」「は」
 Theme … 「が」「を」「は」⁸⁾

(65) 英語の態の差によるθ役とPの関係

- a. 能動態：Agent … P なし（主語位置）
 Exp … P なし（目的語位置）または P なし（文頭：話題化位置）⁹⁾
 Theme … P なし（目的語位置）または P なし（文頭：話題化位置）
- b. 受動態：Agent … by
 Exp … P なし（主語位置）
 Theme … P なし（主語位置）

日本語は、P が発達しているので、P の種類を使い分けることにより、受動態では、3つのθ役を担う名詞句を同時に表現できるのであるが、英語では、同じ主語位置を同時に占めることはできないので、3つのθ役を担う名詞句を同時に同じ文に導入することは理論的に不可能である。日本語文の生成に関しては、次のルールが存在していると考えてよい。¹⁰⁾

- (66) 文の生成に必要なθ役を全てS構造に表出するには、そのθ役を担う名詞句が伴うPは全て異なっていなければならない。¹¹⁾

だから、日本語では、Pが豊富に存在するから間接受動が可能であると言える。一方、英語において間接受動が不可能なのは、これを可能とするための統語上の位置が存在しないからである。

3. 2. 英語による間接受動代替表現の生成

3.1.で、英語は原理的に間接受動表現が不可能であることを論じたが、間接受動でなければ、3つの θ 役を同時に1つの文に導入するしくみが英語にも存在する。それは、以下の3つが考えられる。¹²⁾

- (67) a. Pを用いる。
- b. 所有格を用いる。
- c. haveを用いる。

それぞれ具体例を挙げてみよう。

- (68) a. John was criticized for his paper by Mary. [= (27)]
- b. John's paper was criticized by Mary.
- c. John had his paper criticized by Mary.

日本語では、(68b)に相当する表現は、「の」という助詞を用いる表現と一致するが、これも文法的である。しかも、所有格を用いると、日英共に、能動態においても3つの θ 役を表出できる点を注目すべきであろう。

- (69) ジョン^①論文がメアリーによって批判された。¹³⁾
- (70) a. メアリーはジョン^②論文を批判した。
- b. Mary criticized ^③John's paper.

英語で間接受動的構造が発展した動詞も存在している点にも注意すべきであろう。

- (71) a. I was refused admittance (by them) [鷲尾他 (1997)]
- b. 私は彼らに入場を拒否された。
- (72) a. They refused me admittance.
- b. ?彼らは私に入場を拒否した。

いわゆるSVOO構文の受動態が、日本語の間接受動構造に対応するものであると考えられる。しかし、(72b)に見られるように、能動態にすると日本語が若干不自然になるので、完全に対応しているとは言い難い。次のように、特殊な表現を加えると自然となる。

- (73) 彼らは私に^④対して入場を拒否した。

ただし、全てのSVOO構文が日本語と全く対応しないわけではない。

- (74) a. I was told the story by Jack.
 b. 私はジャックにその話を告げられた。
- (75) a. Jack told me the story.
 b. ジャックは私にその話を告げた。

3. 3. 自動詞と受動態

日本語では、自動詞でも受身表現が存在する。

- (76) a. 妻は死んだ。
 b. 私は妻に死なれた。

英語では、(76b) に相当する表現ができない。何故なら die は自動詞だからである。¹⁴⁾

- (77) a. My wife died.
 b. *I was died by my wife.

die という動詞は、自動詞なので、与えることができるθ役は Theme (die する当事者) のみである。ところが、die という現象には、Exp と Cause の2つのθ役も大きな役割を果たす。

ここで確認できるのは、ある事象に対して想定できるθ役の数は、有限個であるが、動詞によって、それを直接、文中で表出できる数が決まっているということである。

動詞とθ役の数と種類については、次のように示すことができる。下線部は外項である。

- (78) a. die : 1つのθ役 → Theme
 b. survive : 2つのθ役 → Exp, Theme
 c. bereave : 3つのθ役 → Cause, Exp, Theme

ただし、bereave については、Theme は of 句に与えられる。それぞれの例を挙げてみる。

- (79) a. My wife died. [(77a)]
 b. I survived my wife.
 c. The accident bereaved me of my wife.

die を用いて、同時に Exp の項をも表出したいときは、have を用いなければならない。

- (80) I had my wife die (in the accident).

間接受動の代替表現と共に、自動詞の受身構文の代替表現としても have が有効で、大きな役割を果たしているのが分かる。

4. 受動態と使役の間

4. 1. 移行現象と日英差

受動態の2形式、即ち、直接受動と間接受動は、日本語では同じ形式で表せる。

(81) a. ジョンはメアリーに批判された。[直接受動]

b. ジョンは論文を批判された。[間接受動]

しかし、(81b)の「された」を「させた」にすると「使役」の形式になる。日本語では、受動から使役に対して形式が移行するのである。

一方、英語では、間接受動自体が存在しないが、間接受動代替表現としてのhave受動が存在する。つまり、直接受動から間接受動代替表現への形式の移行が見られる。

さらに、have受動の形式は同時に使役をも表すことが可能である。この点が、日英の移行現象における違いである。表にしてまとめてみよう。

(82) 受動・使役構造における日英の移行現象の差

	日本語	英語
直接受動	ジョンはメアリーに批判された。 論文はメアリーに批判された。	John was criticized by Mary. His paper was criticized by Mary.
間接受動	ジョンは論文を批判された。 論文をメアリーに批判された。	* John was criticized his paper. John had his paper criticized.
使役	ジョンは論文を批判させた。 ジョンは論文をメアリーに批判させた。	* Had his paper criticized by Mary. John had his paper criticized. John had his paper criticized by Mary. ¹⁵⁾

英語の場合は、日本語と異なり、間接受動代替表現においても、主語NPは必要である。

4. 2. have構文の受動と使役の意味を決定する要因

have受動の形式が同時に使役をも表すことがあると4.1.で述べたが、その原因を考えてみることにする。

(83) John had his paper criticized by Mary.

a. ジョンはメアリーに論文を批判された。[have受動]

b. ジョンはメアリーに論文を批判させた。[have使役]

同じ形式なのに、同時に2つの意味に解釈できる。¹⁶⁾

(83a)と(83b)の意味の差を決定するのは、haveの外項に与えられるθ役の種類の違いである。表でまとめてみる。

⑧4 have 受動と have 使役のθ役

have 受動: <u>John</u> had <u>his paper</u> criticized by <u>Mary</u> . [Exp] [Theme] [Agent]
have 使役: <u>John</u> had <u>his paper</u> criticized by <u>Mary</u> . [Causer] [Theme] [Agent]

つまり、受動と使役の差は、have 構文の主語のθ役の差に帰着するのである。しかも、英語の場合は、θ役が変わるだけで形式までは変化しない。

一方日本語では、(83a)の「ジョン」はExpで、(83b)の「ジョン」はCauserであるだけでなく、Expが外項の場合は「受身」、Causerが外項の場合は「使役」の助動詞を伴い、形式上も変化するのである。

4. 3. 間接受動と第4項

日本語では、間接受動の構文に第3者を導入することができる。

⑧5 a. メアリーはジョンに子供をほめられた。

b. メアリーはジョンにナンシーの子供をほめられた。

(85a)は通常の間接受動で、これまでに論じた「ジョンはメアリーに論文を批判された」と構造的に同じであるが、(85b)は1つ項(=「ナンシー」)が増えている。

(85b)は、例えば、ナンシーがメアリーにとって子育てにおけるライバルである場合に意味を成す文であろう。ナンシーの子供がほめられることはメアリーにとっては屈辱である。したがって、第4項が入った(85b)文における「メアリー」はExpというよりもPatient(被害者)のθ役を担っていると考えてよい。¹⁷⁾

(85a)を英語にすると、have 受動にして⑧6の形になる。

⑧6 Mary had her child praised by John.

だから、(85b)もhave 受動で表すと⑧7のようになるが、英語では、使役の意味しか出ない点が日本語と異なる。(87a)文は(85b)の意味ではなく、(87b)の意味なのである。

⑧7 a. Mary had Nancy's child praised by John.

b. メアリーはジョンにナンシーの子供をほめさせた。

この主張を意味論の視点から論じ、かつ、統計的にも証明している中川(2000)は、次の例文を挙げている。第4項が入らない(つまり、Bob's horse などとはならない)場合でも、使役の意味が主流となる傾向があることを示しているのである。

⑧ a. He had his horse shot by his crazy son.

b. 彼は、彼の気が狂った息子に自分の馬を撃たせた。

c. *彼は、彼の気が狂った息子に自分の馬を撃たれた。[(88a)の意味で]

さらに、⑧は被害を与えそうな名詞句が by 句に現れているので、文が被害を表す受身構文となるのが自然と思われるが、英語ではやはり使役の意味になるのである。

とにかく、第4番目の項が導入されることにより、日英で主語のθ役が異なるということになる。Beneficiary (受益者) という意味役割 (本論では Bene と省略する) を用いて、次のように分析できるものと考えられる。¹⁸⁾

⑨ 第4項導入構文の日英のθ役の差

日本語：	メアリーはジョンに ナンシーの子供をほめられた。
	[Patient] [Agent] [Bene] [Theme]
英語：	Mary had Nancy's child praised by John.
	[Causer] [Bene] [Theme] [Agent]

以上のことから、英語では (85b) の日本語を have 構文では表すことができないことがわかる。

4. 4. 関与受動文と排除受動文

次の文を考察してみよう。

⑩ メアリーはジョンに自分の子供をほめられた。

⑩文で、「自分」の解釈が「メアリー」であるか、「ジョン」であるかにより、意味のみならずニュアンスが大きく異なる。

⑩ a. [自分 = メアリー] → メアリーは [Bene] (受益者)

b. [自分 = ジョン] → メアリーは [Patient] (被害者)

一般に、第4項導入間接受動構文は、その主語が常に被害者であるとされる。というのは、(91a) の解釈における⑩は、通常「自分」を略して、(85a) の形にするからである。

ここで、次の文を考察したい。

⑩ a. メアリーはジョンに子供をほめられた。[(85a)]

b. メアリーはジョンに子供をけなされた。

⑩ a. メアリーはジョンにナンシーの子供をほめられた。[(85b)]

b. メアリーはジョンにナンシーの子供をけなされた。

(92a) におけるメアリーは受益者で、(92b) におけるメアリーは被害者と言えるのに対し、

(93a) も (93b) もともにメアリーは被害者という含みがある。

(93a) の状況では、ナンシーはメアリーにとって子育てのライバル (=ある意味で敵) であったのだが、(93b) のナンシーにそのような含みはない。つまり、(93b) 文に対して、「(ライバルであるナンシーが子育てを批判されているので、) メアリーは気分がよかった」という意味の文をつなぐのは不自然である。

④ ?? メアリーは、ジョンにナンシーの子供をけなされたので、気分がよかった。

しかし、次のように間接受動構文を用いなければ、自然である。

⑤ メアリーは、ジョンがナンシーの子供をけなしたので、気分がよかった。

(93b) が暗示する状況は、ナンシーがメアリーと仲のよい友達で、そのナンシーの子供がジョンによってけなされているという状況である。だから、④と対照的な次の文が自然であろう。

⑥ メアリーは、ジョンにナンシーの子供をけなされたので、気分が悪かった。

受動文の主語と直接関係付けられない名詞句が Theme として用いられる受動文を「排除受動文」と呼び、③がその例である。これに対し、受動文の主語と Theme を担う名詞句が関係付けられる場合を「関与受動文」と呼び、②がその例である。

排除受動文と関与受動文に関し、次のような傾向があることがわかっている。

⑦ a. 排除受動文は、常にその主語が被害者という θ 役を担う。

b. 関与受動文は、その主語の θ 役の選択は動詞による。

4. 5. 直接受動文と関与受動文の関係

直接受動文を考察する。

⑧ a. メアリーはジョンにほめられた。

b. メアリーはジョンにけなされた。

(98a) 文におけるメアリーは受益者で、(98b) 文におけるメアリーは被害者であることは明白である。

(98a) 文においてほめられる対象はもちろんメアリーである。したがって、この文においては、メアリーは Theme という θ 役と Exp という θ 役を同時に受けているという考え方ができる。しかし、これは θ 基準に違反する。¹⁹⁾

これは、次のように考えることができる。(98a) 文を例にとって考えてみよう。(98a) 文の D 構造は⑨文であると想定する。「自分自身」が基底生成しており、これに Theme が与えられ、その後で、S 構造へ派生する際に「自分自身」が削除されたと考えるのである。

削除される理由として、そのあいまい性が挙げられる。LF（論理形式）で解釈される場合に、あいまい性排除が起こるものと考えてよい。

⑨9 メアリーはジョンに自分自身をほめられた。

⑨9文における「自分自身」が削除されず、S構造まで残ったと考えると、この文はあいまいである。次の2つにあいまいだからである。

⑩0 a. メアリーは [ジョンがメアリーをほめる] られた。

b. メアリーは [ジョンがジョンをほめる] られた。

(100b) の解釈をもつ⑨9文は、「自分自身」がメアリーと関係付けられないので、排除受動文である。

しかし、(100a) の解釈を持つ⑨9文は、Theme を担う名詞句はメアリー自身なので、まさにメアリーと関係付けられることになる。だから、この間接受動文は関与受動文ということになる。

また、メアリーと関係付けられるので「自分自身」の省略形である直接受動文もまた、省略された「自分自身」がメアリーと関係付けられるので、関与受動文である。一般にすべての直接受動文は、関与受動文であると言える。

4. 6. 直接性, 関与性, 他動性, 被害性の関係性

日本語の自動詞の受動態とその主語と Theme 名詞句との関係について考察する。

⑩0) ボブはトムに気絶された。

⑩0)文の項構造は次のように分析できる。

⑩2) ボブはトムに気絶された。

[Exp] [Theme]

⑩0)文は、ボブが被害者であることを暗示する。たとえ、トムがボクシングなどの相手であっても、⑩0)文自体は被害を含意する。

⑩3) a. ?? 試合の直前に、ボブはトムに気絶されて、ボブは内心喜んだ。

b. 試合の直前に、ボブはトムに気絶されて、ボブは内心困った。

(103b) のほうが自然である。気絶することで、不戦勝となり、ボブに有利であっても、(103a) のような言い方はできないのである。⑩0)の表現がボブに対する被害を暗示するからである。しかし、受動態にしなければきわめて自然な文となる。

⑩4) 試合の直前に、トムは気絶したので、ボブは内心喜んだ。

さて、⑩0)文において「トムが気絶すること」に主語であるボブは関与できないので、この文

は排除受動文と言える。ここでも(97)の法則が働いているのがわかる。

ここで、直接性（直接受動文か間接受動文かという視点）、関与性（関与受動文か排除受動文かという視点）、および他動性（他動詞か自動詞のどちらが受身にされているかという視点）、さらに、被害性（主語に受益者か被害者のどちらの θ 役を与えるかという視点）の4つの関係性を例文とともに、表にして整理しておく。

(105) 直接性，関与性，他動性，被害性の関係性

直接性	他動性	例文	関与性	被害性
直接受動	他動詞	メアリーはジョンにほめられた。	関与受動	±被害
間接受動	他動詞	メアリーはジョンに子供をほめられた。	関与受動	±被害
間接受動	他動詞	メアリーはジョンにナンシーの子供をほめられた。	排除受動	+被害
間接受動	自動詞	ボブはトムに気絶された。	排除受動	+被害

注：[±被害]とは、動詞により被害性の有無が決定されることを意味する。

5. θ 理論の枠組みによる日英の受動態の差の原理的説明の新提案

5. 1. 日本語受動態の特殊性

次の文を比較してみる。

(106) a. ルーシーは勉強させられただろう。

b. Lucy may have been made to study.

(106)は受身と使役が組み合わされた構造になっているが、日本語と英語では大きく構造が異なる。

日本語の場合は、受身も使役も助動詞であるのに対し、英語では、この複合的構文生成に、受身は be + p.p. の構造、使役は動詞自体が大きな役割を果たしている。

日本語の場合は、「た」も「だろう」も助動詞であるので、いわば、「させられただろう」は複数の助動詞の連合体であるのに対し、英語では、「た」に相当するのは完了という have+p.p. の構造で、「だろう」のみが助動詞となる。

したがって、日本語は IP の主要部 I が「させ」「られ」「た」「だろう」の一大融合体から成っていると考えられるのに対し、英語は基本的には助動詞 may が主要部を埋めていると思われる。

受身の構造を取り出しても、日英で大きく異なり、英語における規則が当てはまらないと考えてよいと思われる。

英語では、受身形態素（受身における p.p. の形）は格付与能力を持たない。それゆえ、V の右

に生じた目的語は θ 役を得るものの、対格は与えられないので、格を求めてIP指定部に入ることになる。そこで、IP主要部から主格を得て、格フィルターを満たし、派生は正しく収束する。

私は、英語と同じ仕組みが日本語には言えないのではないかと考え、日本語の受身は、目的語位置に生じたNPが主格を得るために主語位置に移動するというのではなく、はじめから、主語位置に基底生成するものと考える。

この主張の基本的な根拠は、(100)の例文解説で論じたように、日英の基本構造の違いであるが、この主張の理由は、2つあると考えている。この理由は、1節から4節までで論じた日本語の統語現象に深く関わっている。

5. 2. 日本語の間接受動の存在理由

英語の受身では、Vの右に生じたNPにThemeという θ 役は与えるが、対格は与えない。しかし、日本語では対格を与えていると思われる現象がある。²⁰⁾

(107) a. ジョン、論文批判されたよ。

b. ジョンは、論文を批判されたよ。

(107a)文は「批判する」という動詞の左に生じた「論文」というNPに対格を与えていると考えられる。というのは、その前の「ジョン」には主格が与えられており、「論文」に主格を与えているとは考えにくいからである。

日本語は、先に論じたように、格をPにより与えることも可能なので、「を」というPを利用して、同様の意味を表すことができるはずである。そこで、対格を与える「を」を用いて(107b)のような文を派生することもでき、しかも(107a)と(107b)は基本的には同意なので、このことが、日本語の受身構文における動詞が対格を与えている証明となる。

日本語における「間接受動」の形式の存在自体が、日本語の対格授与可能性を証明しているわけである。

Expを担うNPが、受動態では外項(主語位置)に現れるのは、動詞がExpを外項に与えているからである。だから、そして、このExpを担うNPははじめから外項の位置(即ち主語の位置)に基底生成しているものと考えられる。もし、同じNPが目的語位置に現れると、Themeという θ 役を動詞が与えるので、意味は異なるものとなる。

(100) a. ジョンは批判された。[動詞が主語位置のジョンにExpを与えている]
[Exp]

b. ジョン批判された。[動詞が目的語位置のジョンにThemeを与えている]
[Theme]

(108a) の状況では、ジョンが批判を受けた結果ショックを感じる可能性があるが、(108b) の状況では、ジョンと関わっている人のほうがショックを受けているという含みがある。例えば、「私とジョンが親友で、そのジョンが誰かに批判されて、私がショックを受ける」というような文脈で (108b) は自然な文となるのである。

5. 3. 日本語の排除受動の存在理由

日本語の受身構造における動詞の対格授与説のもう1つの理由は、英語にはない排除受動の存在そのものである。

一般に「ほめる」という動詞は、受身構文では Exp の中でも Bene というθ役を主語名詞句に与え、「けなす」という動詞は、同じ構文で、Exp 中の Patient というθ役を主語名詞句に与える。しかし、(93a) と (93b) のような「排除受動」の場合は、「ほめる」の場合も、「けなす」の場合も、主語名詞句は、同じ Patient というθ役が与えられている。

特に「ほめる」が Patient というθ役を与えるのは、どうも不自然である。そこで、「排除受動」の場合は、この Patient というθ役は、I (受身の助動詞) が与えると考えるのである。排除受動のθ役に関する原則が次のように想定できるものと提案する。

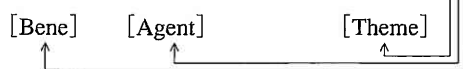
(100) 同定関係優位の法則その1

日本語では、主語 NP と目的語 NP 内の NP の間に同定関係があれば、その場合に限り、動詞は Exp というθ役を主語 NP に与える。

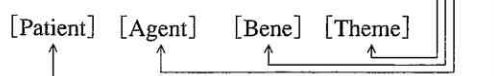
勿論、(100) を満たす場合、Exp は、「ほめる」の場合は Bene で、「けなす」の場合は Patient と解釈される。だから、同定関係がなければ、動詞は主語 NP にθ役を与えられないので、I から Patient というθ役を受けることになる。²¹⁾

次の (110a) は同定関係がある関与受動の場合で、(110b) は同定関係のない排除受動の場合である。図式で示しておこう。

(110a) メアリー_iはジョンに(自分_iの)子供を ほめられた。²²⁾



b. メアリーはジョンにナンシーの子供を ほめられた。



5. 4. 英語の Have 構文が受身と使役の両方の機能を持つ理由

4.3.と4.4.で論じたように、日本語の「排除受動」に相当する英語構文が存在せず、(85b)を have 受動で表せず、次の (111a) を (111b) のように翻訳しようとする、(111c) のような使役の意味になるのは何故であろうか。

(111) a. メアリーはジョンにナンシーの子供をほめられた。

b. Mary had Nancy's child praised by John.

c. メアリーはジョンにナンシーの子供をほめさせた。

これは、(109)の法則と酷似した次の法則があるものと考えられる。

(112) 同定関係優位の法則その2

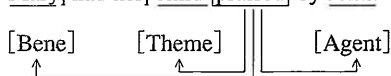
英語では、主語NPと目的語NP内のNPの間に同定関係があれば、その場合に限り、埋めこまれた動詞は、Exp という θ 役を主語 NP に与える。

日本語の場合と同様、Exp の中身が Bene であるか Patient であるかは埋め込み動詞により、have によるものではない。

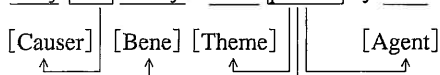
(111b) には同定関係がないので、(112)の法則は当てはまらず、主語 NP は θ 役を埋め込み動詞からはもらえなくなる。そこで、主語 NP に構造的に近い have から Causer という θ 役をもらうことになるのである。だから、(111b) 文は使役の意味しか出ないのである。

一方、同定関係がある文、例えば “Mary had her child praised by John.” は、praise から Bene という θ 役を優先的に受けることになるのである。図式で示しておく。

(113) a. Mary_i had her_i child [praised] by John. [同定関係あり]



b. Mary [had] Nancy's child [praised] by John. [同定関係なし]



6. 結語

本稿は、英語と日本語における受動態の構造を比較して、共通点と相違点を洗い出し、生成文法の θ 理論の枠組みで論じた。

共通点として、日英共に同じ意味の動詞には θ 役の種類と数が一致している可能性を挙げたが、相違点は、特に、間接受動と排除受動の存在が日本語に際立っていることを概観した。

日本語は、受動構文で動詞の対格付与が可能であるという新解釈を提案し、その根拠が、間接受動と排除受動の存在自体にあることを論じた。

また、英語において、何故、排除受動がなく、have 構文が受身と使役の両方を行き来するのかに対する解決策を、日本語における「受動構文対格付与可能説」を論じたときと同等の発想(=「同定関係優位の法則」)で提示することができることを示した。

本研究を通じて、今後の検討課題も多く明らかになった。例えば、本稿で導入した Exp と、その下位区分と仮定した Bene や Patient の関係はもう少し詳しく検討すべきであろう。

次の文を観察してみる。

(114) a. ジョンはいじめられた。

b. ジョンは批判された。

(114a) 文は間接受動文を作れないが、(114b) 文は間接受動文を作れる。

(115) a. *ジョンは～をいじめられた。

b. ジョンは～を批判された。

一般に間接受動文が作れる構造における直接受動文 [= (114b)] は、間接受動文の Theme 名詞の省略型であるとも考えられるため、D 構造が間接受動文の形であると、4.5. で推論したが、その考え方によれば、(114a) 文と (114b) 文はまったく違った構造から派生していることになるが、それは正しい推論かどうかを検討する必要がある。

また、同時に、日本語における受動文はすべて間接受動文の形が D 構造で生じており、(114a) 文のような純然たる直接受動文は、S 構造へ派生するとき「自分自身」が強制的に削除されたと見ることができるかどうかも検討課題であろう。

注

1) 「強奪された」という感じであれば、次の表現になる。

(i) Jack was robbed of his bicycle.

2) 名詞句の認可条件は、格フィルターの満足に他ならない。

(i) 格フィルター

全ての名詞句は格を1つ与えられなければならない。

日本語の名詞句は常に P により格を受け、格フィルターを満たすのに対して、英語は、文の主語は必ず、I により主格をもらい、他動詞の目的語名詞句は、その他動詞 (= V) により目的格をもらい、その他の名詞句は P により格を受け、格フィルターを満たすのである。

3) この文は、次の2つにあいまいである。

(i) その仕事がジャックによって残された。[本文中での意味]

(ii) その仕事がジャックに対して残された。

この原因は、「に」が「動作主」 [= (i)] と「着点」 [= (ii)] の2つの θ 役を担うからである。

4) 移動したり、影響を受けるものは、一般に主題である。意志を特に持たないので「動作主」と考えないのである。たとえば、(i) は、[1] と [2] の2つにあいまいである。

(i) John hit the car.

[1] ジョンは車にぶつかった。

[2] ジョンは車を殴った。

[1] の解釈では、ジョンは移動しているので Theme で、車は動かない場所と考えられるので Location, [2] の解釈ではジョンは行為者なので Agent で、車は殴られてへこむかもしれないので影響を受ける Theme である。主題階層が低い名詞句が受身の主語に来るので、(ii) の解釈は (i) の [2] の受身の意味のみに対応する。

(ii) The car was hit by John.

[1] *車はジョンにぶつかられた。

[2] 車はジョンに殴られた。

5) 日本語では、主語の省略は随意であるが、主語のない文は第1人称が主語であると解釈される傾向があるため、この文は「私は論文を批判された」の意味になりうる。

6) ジョンが Exp の状況では、この文は非文であるが、ジョンが Theme であれば可能である。例えば、スーザンとジョンが恋人同士で、「その恋人であるジョンが批判された」とスーザンが漏らす場合には自然である。

7) 「話題」という二次の意味役割は、日本語では「は」でマークされる。この「は」を用いる場合、第一次の意味役割 (= θ 役) の視点、即ち Agent, Exp, そして Theme のどれを意味するのかが曖昧になるが、他の P すなわち「を」や「が」との組み合わせにより、曖昧さが解消される。なお、英語の場合は、「話題」は統語的位置によって示される。

8) Theme が「を」を伴う形が間接受動に他ならない。

9) 話題化位置に現れた Exp の例を挙げておく。

(i) John, Mary criticized.

10) P が同じであれば、複数の θ 役を一文内に導入できないということである。

(i) *メアリーはジョンを論文を批判した。

(ii) *ジョンは論文はメアリーに批判された。

11) ただし、これには条件がつくようである。

(i) 「は」と「が」が共起するときは、「は」「が」の順番になる。

例えば、次のような例が挙げられる。

(ii) [1] ジョンは、メアリーが論文を批判した。

[2] *メアリーが、ジョンは論文を批判した。

(iii) [1] ジョンは、論文がメアリーに批判された。

[2] *論文が、ジョンはメアリーに批判された。

(ii) [1] において、「ジョンは」は「ジョンについては」にしたほうが、容認度がさらに上がると思われる。なお、「は」は Exp という θ 役を示す傾向があるが、これは、人を話題にすることが多いという現状が反映したものであると考えられる。

12) このようなしくみは、3つの θ 役を1文に組み込みたいという自然の欲求が言語の世界に影響を与

えた結果の産物と言える。

- 13) この(69)および(70a)文は、(68)の制約を満たす。
- 14) 英語の自動詞が受動表現を持つのは、動詞とPの組み合わせが他動詞と再分析された場合のみである。
- (i) The cat ran after the rat.
(ii) The rat was run after by the cat.
- 15) have 受動の形式は、使役と同じ形式であるが、一般に受動と使役の意味は、被害と受益に相当するのが自然である。
- (i) 受動→ジムは財布を盗まれた。→被害
(ii) 使役→ジムは財布を盗ませた。→受益
- (i) においては、財布はジムのものであり、(ii) においては、財布はジムのものではないという解釈が普通である。
- 被害と受益では意味的に対照的な概念だから、通例文脈から状況が判断でき、混乱が生じることがないという点から、受動も使役も同じ形式となっているものと思われる。
- 16) (63)は「ジョンはメアリーに論文を批判してもらった」という解釈も成立する。これは、使役の用法と考えられ、受益の意味を強調した形である。これは、日本文化的な上下関係に基づく訳であると考えることができる。欧米人は、「批判させる」と「批判してもらう」の差がそれほどないものと考えてよいだろう。
- (i) ジョンはメアリーに論文を批判させた。[上：ジョン/下：メアリー]
(ii) ジョンはメアリーに論文を批判してもらった。[上：メアリー/下：ジョン]
- 17) 厳密には、「ほめる」という動詞が与えるθ役は、義務的な [Agent] (ほめるという行為者) と [Beneficiary] (ほめられる対象者) の2つと [Reason] (何故ほめるかという理由) の合計3つである。だから、第4項を導入した間接受動構文の主語に与えなければならないθ役をどこから得るのかに関する理論構築は、今後の課題としたい。
- 18) 子供をほめられて嬉しいのはその親であり、子供自体ではないので、受益者は親である。もちろん(85b)の状況ではナンシーの子供をほめるという行為がメアリーに対してなされているので、ナンシーはそのことを盗み聞きするなどしない限り、実際の喜びは感じないのであるが、自分の子供の行為をほめられること自体は「益」なので、[Bene] (受益者) とした。次の点も確認しておく。
- (i) その子供はほめられた。[受益者は子供]
(ii) ナンシーの子供はほめられた。[受益者はナンシー]
(iii) ナンシーは子供をほめられた。[受益者はナンシー]
(iv) メアリーはナンシーに子供をほめられた。[受益者はメアリー]
- 19) θ基準とは次のような条件である。
- (i) 意味を担う項は、[+V]の範疇からθ役を1つ受けなければならない。
(i) において、[+V]の範疇とは、V (=動詞) と A (=形容詞) である。生成文法では、語彙範疇に次のような素性を設定している。なお、[-N]の範疇、すなわち、V (=動詞) と P (前置詞) は格を付与できる範疇であるとされる。
- (ii) [1] N : [+N, -V]
[2] V : [-N, +V]
[3] A : [+N, +V]

[4] P : [- N, - V]

- 20) 日本語では、パラメータの違いにより、Vの左に生じたNPに対格を与えると考える。
- 21) 同定関係がある場合は、Iは θ 役を与えることができないが、これは θ 基準に違反しない。というのは、 θ 基準は、「意味のあるNPが受けなければならない」のであって「ある範疇が θ を必ずNPに授けなければならない」ということではないからである。だから、動詞などの範疇が θ 役を与えないからNPが生じないことがあったりするし、また、NPが生じると必ず、どこかから θ 役を受けなければならないのである。
- 22) NPの右横のiはindexの略で、同定関係を表している。

参考文献

- Chomsky, N. (1981) Lectures on Government and Binding. Dordrecht: Foris.
- 井上和子 (1995) 「他動性と使役構文」徳永美暁 (編) 『言語変容に関する体系的研究およびその日本語教育への応用』神田外語大学。
- 益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『英語と日本語と：林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版。
- 中右 実 (1991) 「経験の HAVE」『現代言語学の歩み』開拓社。
- 中川 昭 (2000) 「迷惑受け身と経験受動態」『大阪経済大学教養部紀要』18。
- 大庭幸男・島 越郎 (2002) 『左方移動』英語学モノグラフシリーズ10, 研究社出版。
- 柴谷方良 (1982) 「ボイス：日本語と英語」『講座日本語学』第10巻, 明治書院。
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較——受動文, 後置文の分析』くろしお出版。
- 鴛尾龍一・三原健一 (1997) 『ヴォイスとアスペクト』日英語比較選書7, 研究社出版。